Creative Application A10

東洋思想史1: 自己内の探究・我と私と存在

2024年度

渡邉 賢悟 (渡辺電気株式会社)

受講のてびき

- 本資料は作成者の解釈が含まれます. 答えのない議論があります

- 前半：本日のテーマ紹介と座学
- 後半：テーマを深める談義・質問・考察

- 気になることをメモをしながら受講してください

資料の見方

テーマに沿った項目

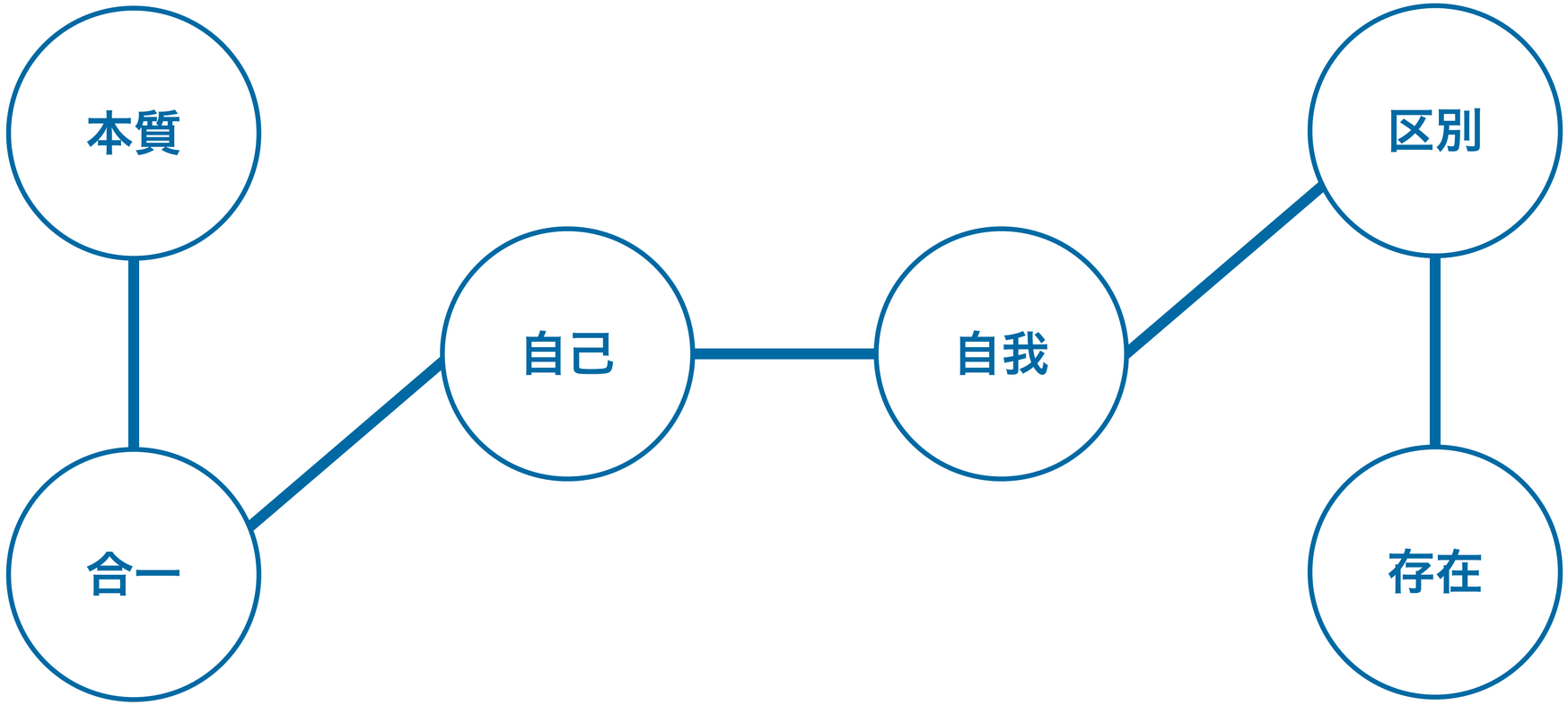
（座学で説明します）

左の内容に関連した
補足キーワード
(調べ物に役立ててください)

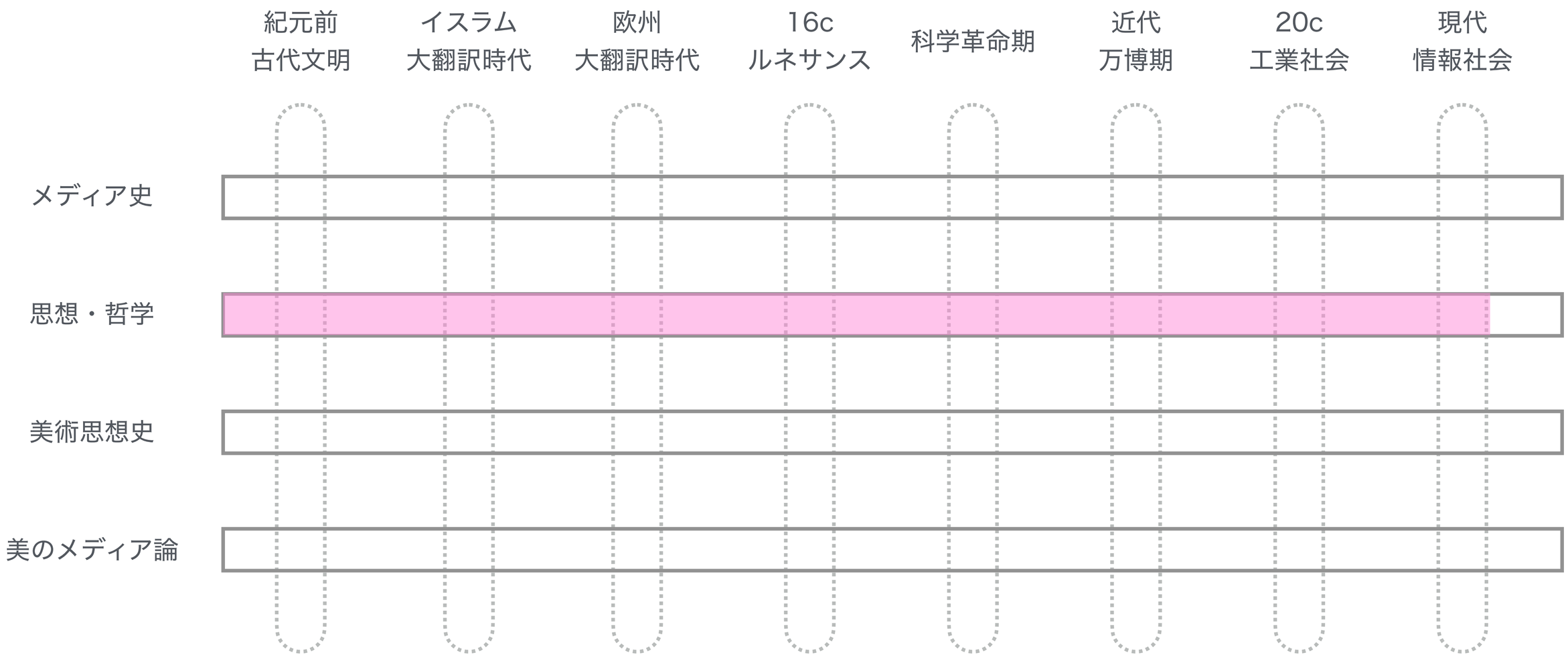
テーマ

- なにものでもない自分 が ただ在る ということ

関連要素図



今回の領域


紀元前
古代文明
イスラム
大翻訳時代
欧州
大翻訳時代
16c
ルネサンス
科学革命期
近代
万博期
20c
工業社会
現代
情報社会
メディア史
思想・哲学
美術思想史
美のメディア論

東洋の思想の展開1 - ウパニシャッド哲学

- **梵我一如：世界(梵)と自己(我)を同じと考える**
  - 世界と自己は同一である
  - 分ける → 悩みの始まり
- **我は「〜に非ず」**
  - 我は認識の源で，我は我を認識できない
  - 「自分は〜ではない」としか言えない

関連キーワード

- 古代インド哲学, バラモン教
- 梵我一如, ブラフマン, アートマン
- ヴェーダ, ウパニシャッド
- ヤージュニャヴァルキヤ
- サルトル
- 認識主体と認識対象
- 認識の無限遡行

東洋の思想の展開2 - 自己の多層性

- **自己(我と私)の多層性**
  - 「我」：舞台の演者
  - 「私」：「我」をみる観客
- **「我＝私」の感情移入と誤解**
  - 「我」の幸不幸を「私」と勘違いして苦しむ
  - 「我」を見守る穏やかな「私」
- **「私」→ なにものでもないただ在る自分**

関連キーワード
- バラモン教
- ウパニシャッド
- 初期仏教
- 梵我一如
- 無我・有我
- マインドフルネス
- 鎌倉仏教
- 禅

東洋の思想の展開3 - 原始仏教

- ウパニシャッドの実践と苦行
  - 苦痛の克服 = 我の囚われの克服という考え
- **ゴータマ・シッダルタ(仏陀)の目覚め**
  - 苦行こそ囚われ. 「我」の強化であると否定
- **中道(極端でなく余裕ある状態)**
  - 余裕は「我」の囚われの解放につながる

関連キーワード

- 原始仏教
- ゴータマ・シッダルタ, 釈迦
- 悟り・目覚め
- 四諦
- 八正道
- 中道
- 無我・有我

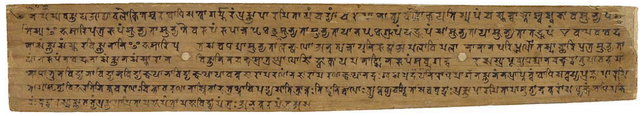
東洋の思想の展開4 - 存在と区別・縁起・空

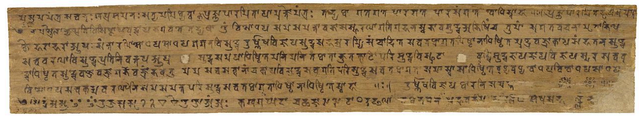
- **縁起**
  - すべては**関係性**と**相互作用**でのみ成り立つ
- **色即是空・空即是色**
  - 物質(色)に実体はなく(空), 実体がない(空)のが物質(色)である

- **区別から発生する存在**
  - 物事を分け区別した部分を存在と呼ぶ. **存在に不変の実体はない**
- **区別を取り払う営み**
  - 区別を取り払っていき, 最後「我」すら取り払う → **無我**
  - 区別のない無我に至って観える本質 → **空**

関連キーワード

- 大乗仏教、上座部仏教
- 龍樹
- 般若経、般若心経
- 縁起、空
- 諸行無常、諸法無我





東洋の思想の展開5 - 老荘思想と中国仏教

- **老子：道(タオ)と無為自然**
  - 道 = 本質の根源
  - 世の利益ある行為は，区別を生む
  - あるがままは，自然な営みを生む
- **(大乗)仏教との親和性**
  - あるがままは柔軟で区別を手放し，道に近づく
  - 老荘思想と混ざり，中国仏教が発展

関連キーワード

- 大乗仏教、上座部仏教
- 老子・荘子、老荘思想
- 道(タオ)
- 無為自然
- 上善如水
- 玄奘三蔵、唯識

なにものでもない自分 が ただ在る ということ

- **あるがままの「私」から観える本質**
  - 私 = 我 という誤解から生まれる苦しみ
  - 余裕を持ち，我を手放すと見えてくる本質
  - 関係性の中に浮かび上がる自己
  - 実体のない「空」や「道」の追求
  - 区別の堅さから，あるがままの柔らかさへ

CreApp-Bのリンク9

- **コンテンツの主張を強めるだけでなく, 静かに在ることを示す工夫**
  - 強すぎる主張はメディア化を阻害することがある

- もっとも伝えたい主旨についても, 有と無を活かして提示する
- ただ在るという存在感の演出について模索する

本日の談義・考察一助

a. 本資料では本質的な自己に「私」の言葉をあてた.
「我」と「私」の関係性を考察してみたい

b. 西洋と東洋の自己の捉え方の違い・共通点を考えてみる

c. 西洋ではデカルト以来，主観の認識が起点となった.
比較して，東洋の自己はどう捉えられるだろうか

d. 西洋と東洋で存在へのアプローチが大きく異なる.
それぞれ, どのような点が特徴的といえるか

e. 上記に限らず, 自由に質問・問題提起・雑談をしてほしい

次回予定

- **東洋思想史2：東西思想の考察と日本**

参考文献

1. 藤田一照, 「アップデートする仏教」, 幻冬舎, 2013
2. 藤田一照, 永井均, 山下良道, 「仏教3.0を哲学する」, 春秋社, 2016
3. 飲茶,「史上最強の哲学入門」, 河出文庫, 2015
4. 飲茶,「史上最強の哲学入門 東洋の哲人たち」, 河出文庫, 2016
5. 藤田正勝, 「日本哲学史」, 昭和堂, 2018
6. 岡本 裕一朗, 「いま世界の哲学者が考えていること」, ダイヤモンド社, 2016
7. 井筒 俊彦,「イスラーム文化 - その根底にあるもの」, 岩波書店, 1991
8. 伊東 俊太郎, 「十二世紀ルネサンス」, 講談社学術文庫, 2006
9. 竹田 青嗣, 「現象学入門」, NHK出版, 1989
10. マルクス・ガブリエル著, 清水 一浩訳, 「なぜ世界は存在しないのか」, 講談社選書メチエ, 2018